

□ 質疑応答

質問① P.20 A) 6:1 イザヤは「高く上げられた御座に着いておられる主を見た。その裾は神殿に満ち」の箇所、裾が神殿に満ちていたとは、何か意味しているのでしょうか？

御座についておられる主を見たという記事が、旧約聖書にもう1カ所あります。出エジプト記24:9~11、エジプトを脱出してホレブの山まで来たイスラエル民族の代表者たちです。モーセとアロン、アロンの息子のナダブとアビフ、そしてイスラエルの長老たち70人、合計74人が、見たという記事です。

10節「**彼らはイスラエルの神を見た。御足の下にはサファイアの敷石のようなものがあり、透き通っていて大空そのものようであった**」とあります。「サファイアの敷石のようなもの」が御座です。神を見たとはありますが、その全身の記述はありません。「御足」とあるので、おそらく、彼らが見たのはそこまでだったのでしょう。

イザヤも、御座に着いておられる主を見ましたが、「その裾」、つまり足もとしか見ていなかったと推測されます。

これらの記事に対して、神の姿の全身を見た人がいます。それは、新約聖書の黙示録にでてくる使徒ヨハネです。黙示録1:13~17、次のように記されています。

ヨハネはまず足もとから描写して、「**足まで垂れた衣をまとい**」。この衣は裾が足まで垂れていますから、イザヤが見た「その裾は神殿に満ち」と衣の形状は似ています。

ヨハネはさらに視線を上にあげて、「**胸に金の帯を締めていた。**」

さらに視線を上にあげて「**その頭と髪は白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は燃える炎のようであった。**」

次に、足に視線を戻して、「**その足は、炉で精錬された、光り輝く真鍮のようで、その声は大水のとどろきのようであった。**」

声を聞いたので、視線を再び上げて、「**右手に七つの星を持ち、口から鋭い両刃の剣が出ていて、顔は強く照り輝く太陽のようであった。**」

このようにヨハネは神の姿の全身を見ました。その結果、どうなったでしょう。17節です。「**この方を見たとき、私は死んだ者のように、その足もとに倒れ込んだ。**」

イザヤが倒れずにすみ、ヨハネは死んだかのように倒れ込んだ、その違いは神の姿を足もとだけ見たか、全身を見たかの違いによるのだと思われます。

黙示録でヨハネが見た神は、1:18に「わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている」とありますように、イエス・キリスト、第二位格の神です。ですから、イザヤが「主を見た」というのも、第二位格の神、受肉前のイエスであると考えられます。

質問② 「主を見た」というのが、第二位格の神、受肉前のイエスを見たということであれば、新約聖書のヨハネ 12：41 で、イザヤはイエスの栄光を見た、とあるのは、そのことを言っているのですか？

その通りです。ヨハネの福音書 12：40 は、イザヤ 6：10 を引用しています。そして、12：41 で、「イザヤがこう言ったのは、イエスの栄光を見たからであり」と記しています。イザヤが「高く上げられた御座に着いておられる主を見た」と言っているその「主」は、第二位格の神、受肉前のイエスです。

神は霊であり、聖いお方です。肉なる人の目で神を見ることはできず、罪に汚れた人間には近づくこともできないお方です。

【そういう神が今ここにおられる】ということを経験する現象として示すのが、煙、雲、炎などです。イザヤが主を見たというこの場面でも、4 節に「煙」が登場します。煙そのものは神ではありませんが、神の臨在を示す現象です。この現象を聖書では神の栄光、シャカイナ・グローリーといいます。

イザヤは、シャカイナ・グローリーである煙だけでなく、まさに「主を見た」というのですが、このように神ご自身が人間のような姿をして、人間の前に現れてくださることがあります。それを旧約聖書では、「主の使い」、あるいは「主」と呼んでいます。これはいずれも、第二位格の神（子なる神）、受肉前のイエスです。

このことがわかると、次の聖書箇所の意味が明確に理解できます。

ヨハネ 1：18 いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子なる神が、神を説き明かされたのである。

質問③ P.20 A) 6：2 の解説で、「天使には大きく 3 つの階級区分がある。下から順に言うと、一般の天使、セラフ（複数形：セラフィム）、ケルブ（複数形：ケルビム）である」とのことでした。ダニエル 12：1 に記されている天使ミカエルの階級はどれですか。西洋の絵画では、ミカエルには翼があるように描かれています。

一般の天使です。「大いなる君」（ダニ 12：1）とありますので、一般の天使の中での階級は最上級です。しかし、翼はもっていません。ミカエルは「あなたの（ダニエルの）国の人々を守る」（ダニ 12：1）とありますので、イスラエル民族の守護天使です。

ダニエル書の中には、ミカエルのほかに、ガブリエルという天使も登場します。彼の役目は、神の使信を伝達することです。ルカの福音書では、祭司ザカリヤに現れ、

その後、ナザレという町の一人の処女マリアに現れました（ルカ 1 : 19、26）。

ダニエル書 9 : 21 には、「ガブリエルがすばやく飛んで来て私に近づいた」とありますが、直訳すると、「ガブリエルが、何の気配もなく一瞬のうちに（そばに来ていて）、私にさわった」です。ガブリエルがすばやく飛んで来るのをダニエルが見たわけではありません。「すばやく飛んで来て」と訳されているヘブル語は、「すばやく、気づかないうちに、一瞬のうちに」の意味です。【誰かが近づいてくる気配は全くなかったのに、はっと気づくと隣にガブリエルがいた】というような情景を示しています。

ですから、ガブリエルに翼があって飛んで来たというわけではありません。ガブリエルも一般の天使の階級に属しますので、翼はありません。

質問④ P.21 B) 6 : 6~7 天使は燃える炭をイザヤの口につけてイザヤをきよめたということですが、今の私たちも、信者になったあと、このような体験をする必要があるのでしょうか。

ここでのきよめは、イザヤが預言者として働きをするにあたって何か妨げになっていた罪をきよめた、というようなことではありません。イザヤであっても内側には罪の性質をもっています。その罪の性質をおおうことで、死なずに、神の栄光の前に立つことができるようにされたのです。

まずイザヤが主を見た瞬間に抱いた恐れから見ましょう。「ああ、私は滅んでしまう。この私は唇の汚れた者で、唇の汚れた民の間に住んでいる。しかも、万軍の主である王をこの目で見たのだから」（イザヤ 6 : 5）とイザヤは叫びました。

「滅んでしまう」とは、死ぬ、処刑される、という意味です。神の聖さの前には、罪ある汚れた人は死ぬほかないのです。

「唇の汚れた者」とは、心の中に悪いものがあって、それが口を通して、外に出て来る、だから唇が汚れている、ということです。心の中の悪いものとは、罪の性質です。

イエスが公生涯の中で、パリサイ人たちに、口と汚れの関係について教えた記事があります。ユダヤ教パリサイ派では、モーセの律法に定められた食物規定を守るためには、食事前に厳格な儀式的手洗いをしなければならない、と人々に教えていました。それに対してイエスは次のように教えました。

「口に入る物はみな、腹に入り、排せつされて外に出されることが分からないのですか。しかし、口から出るものは心から出て来ます。それが人を汚すのです。悪い考え、殺人、姦淫、淫らな行い、盗み、偽証、ののしりは、心から出て来るからです。これらのものが人を汚します。しかし、洗わない手で食べることは人を汚しません。」
（マタイ 15 : 17~20）

旧約聖書の時代、モーセの律法の下にあったイザヤの場合、罪のきよめはエルサレムの神殿の祭壇の上にささげる動物の犠牲によるものでした。神殿では、毎日、毎週、毎月、そして年間で定められたいくつかの祭りのたびごとに、多くの犠牲がささげられ続けました。

では、今の時代の私たち、新約時代の信者はどうでしょうか。もはや動物の犠牲をささげる必要はありません。イエス・キリストが旧約聖書で預言されていたとおりに十字架で私たちの罪のために死なれたからです（I コリ 15：3）。動物の血は何度繰り返しても罪を取り除くことはできず、その都度、罪をおおうだけでしたが、キリストの犠牲はただ一度だけですべての罪を取り除きました（ヘブル 9：26、10：4）。

私たち新約時代の信者は、信じて救われたその瞬間に、すべての罪を取り除かれ、きよめられました。ですから、神の目には「完全にきよい」と言っていただけの地位に就けられたのです。

しかし、私たちが死んでこの肉体を離れる日まで、私たちの内側には罪の性質が残っています。罪の性質に引きずられて、信者であっても日々の生活の中で罪を犯すことがあります。しかし、それによって私たちは救いを失うことは決してありません。

ただし、神との交わりができなくなり、信仰生活をしていく力がなくなります。神との交わりを回復するためには、第一ヨハネ 1：9、父なる神の前に祈り、自分がこういう罪を犯しましたと言い表し、認めることです。そうすれば、気づいていない罪も含めてすべて赦され、罪からきよめられ、神との交わりが回復します。

このように新約時代の私たち信者に命じられているのは、「気づいた罪を言い表す祈り」です。天使が持ってくる燃える炭によるものではありません。今の私たちは、イザヤのような体験をする必要はありません。

質問⑤ 「燃える炭」とは、何を意味しているのでしょうか。それとイザヤのきよめとどう関係するのでしょうか。

燃える炭は、天の宮の祭壇から取って来られました。祭壇は、犠牲を捧げる場所であり、燃える炭は犠牲を焼くためのものです。よって、きよめとは、犠牲の血によって罪の代価を支払うことが前提であると、示されています。

そして、燃えさかる炎、聖書では、火で焼くことはきよめを意味します。

イザヤはきよめられた結果、「あなたの咎は取り除かれ、あなたの罪も赦された」（イザヤ 6：7）と宣言されますが、この時点ではイエス・キリストの十字架のみわざは、まだ将来のことです。

ですから、「咎は取り除かれ」と訳されているヘブル語は咎を消滅させるのではなく、咎とイザヤとの間を引き離すという意味です。また「罪は赦された」と訳されているヘブル語は、直訳すると「罪はおおわれた」です。

このように、旧約時代の聖徒たちの罪のゆるしは、あくまでも罪をおおうだけでした。彼らが完全にきよいものとされるためには、キリストの十字架の犠牲を待たねばなりません。そのために、旧約時代は信者であっても、死ぬと彼らの靈魂は、地の下、ヘブル語でシェオール、日本語で「よみ」と呼ばれる、死後の靈魂の行先へ下らねばなりませんでした。

イエス・キリストは、十字架で死んでその肉体は墓の中に3日間あったとき、その靈魂はよみに下りました。そして、死んで3日目に復活し天に昇ったとき、よみにいた旧約時代の信者たちの靈魂もいっしょに引き連れて天に昇りました。

今、新約時代の私たちは、死んでよみに下ることはありません。イエス・キリストの十字架の犠牲により、信じたときに完全にきよいものとされましたから、死ぬと私たちの靈魂は、意識をそのまま持続して、ただちに天に引き上げられ、体の復活のときを待つのです。

質問⑥ P.20 A) 6:1 イザヤは「高く上げられた御座に着いておられる主を見た」の箇所、「主」はヘブル語で「ヤハウエ」ではなく、「アドナイ」が使われていて、新改訳聖書では「ヤハウエ」なら太字の「主」と表記し、そうでないならば太字にせず「主」と表記している、とのことでした。聖書の他の箇所で「主」が太字になっていない箇所をさがすと、創世記 20:4 と 23:6 がありました。この二つの箇所は、いずれも、「全世界を支配する主権者なる神の意味合い」で使われたのでしょうか？

「ヤハウエ」は、イスラエルと契約関係にある神という意味をもつ神の名です。ですから、イスラエル民族のみが使うものです。それに対して、「アドナイ」は全世界を支配する主権者なる神という意味合いを持っていますので、イスラエル民族以外でも使うことができます。創世記 20:4 では、ゲラルの王が夢の中で現れた神に向かって、「アドナイ」と呼びかけています。

「アドナイ」は、「アドン」の強調形です。「アドン」は、人間同士の関係の中で相手を尊重して「ご主人さま」と呼びかけるときに使われます。創世記 23:6 は、ヒッタイト人たちがアブラハムに対して、「アドン」と呼びかけています。

ですから、太字ではない「主」は、神についても使うし、人間についても使う用語だということです。